



リレートーク #177



墓参り

深澤 祐二

東日本旅客鉄道
取締役副社長

4月の終わり、ご先祖の墓参りに行った。

連休中のよく晴れた日で、新緑の山並みや今年最後の桜が美しく目に沁しみみた。去年はいつも通り咲くのが悲しい桜だったが、今年はまた元のように明るく気持ちを前向きにしてくれた。きっかけは年老いた両親が久しく墓参りをしていないので、死ぬ前にお参りしておきたいと言い出したからだ。両親の食欲を見ているとすぐに死ぬとは思えないが、最近ずいぶん足腰が弱ってきていることだけは確かなので、季節の良いこの時期に決め、息子も連れて三世代で出掛けた。

墓は山梨の見晴らしの良い丘にある。田舎によくある集落のはずれにある墓地である。田舎の農家なので、家系図などは残っていないが、墓は江戸時代のものも残っており、何が書いてあるか判読できないものも多い。

小さいころは、北国から海を渡りSLに乗って、両親や兄とともに、年に数回この地を訪れていた。昔の家はなくなっているが、鶏が放し飼いにされ、土蔵がある典型的な田舎家であった。われわれが行くと祖父母はいつも大いに喜び、かわいがってくれた。鶏を追いかけて、土蔵を探検し、木登りや川釣りをするなど、かつての日本の子どもたちがどこでもやっていたことをこの地で経験した。五右衛門風呂に入るのと夜一人で便所に行くのだけは苦手だった。

その祖父が亡くなった時、この墓に土葬で葬った。それまで経験した葬式はすべて火葬だったので、この葬式はまるで映画の一場面のように鮮やかな記憶として残っている。薄曇りの中、白い旗を先頭にして祖父を納めた棺ひつぎがそれに続く。墓地まで葬送の列が静かに進んでいく。深い深い大きな穴に棺を沈め、皆で土をかけて埋める。なぜ焼かないのかと大人に聞いたら、死んだら人はみな土かえに還るのだと当たり前のように答えられた。今でもこの墓に行くと、その言葉を思い出す。墓参りを通して人は自分の来し方と行く末に思いを巡らし、存在を確かめる。かつて日本中にあった土葬の習慣は、わが田舎でも祖父で終わりになり、祖母はその隣に火葬で葬られた。土に還った祖父は久しぶりのわれわれをどう思うで眺めていたのだろうか。

父は線香を上げた後、満足げに墓を眺めていた。少し親孝行をしたのかなと思った。見上げると雪をかぶった富士山がくっきりと輝いていた。